学生生活への扉

両想いの人生を

国際日本学部専任講師
眞嶋 亜有
Majima Ayu

眞嶋ゼミでは定期的にホールで研究発表会を開催、3年・4年が講評し合うなど学年をこえた交流を図っている

眞嶋ゼミでは各分野で活躍するゲストをお招きしレクチャーと交流の機会を設けている

皆さんは、何のために大学に入りましたか。良いとされる大学に入り、良いとされる企業に就職し、良いとされる伴侶を得、良いとされる人生を過ごすためでしょうか。

学問、特に人文系の究極的テーマは、人間とはなにか、生きるとはなにか、そして自分とは何なのかを知ることです。

私はこれまで、師や様々な方との出逢い、本との出会い、そして学びや体験によって、わかったことがあります。それは、人がどれだけ稼ごうとも、どれだけ美貌を持とうとも、いかなる偉業を成し遂げようとも、富や美貌や社会的地位と幸せは全く関係がないということです。社会に生きる以上、承認や達成感は自信や励みになるでしょう。しかし、それはあくまで一時的な動機付けや充足に過ぎません。

では私たちにとって幸せとは何なのか。それはどれだけ自分を生き、体験できたかにあると私は考えます。つまり、どれだけ自分が自分の理解者になり親友になり、自分と両想いに生きることができたかにあります。

なぜなら、私たちは、生涯、自分を生きるという課題を与えられ、生まれてきました。

それは有史以来、他の誰も味わえない、唯一無二の体験的世界です。しかし、私たちは、生まれてから両親や養育者の影響下で育ち、気付けば、自分が本当にどう思い、どう感じているかよりも、親の期待や社会的評価、そして周囲の目を優先して生きてしまいがちです。それは、自分を生きるという、自分だけに与えられた課題を宿題のままにしていないでしょうか。自分の想いを置き去りにして生きることほどつらく苦しいことはありません。たとえ自分を嫌になって、世界のいかなる果てにたどり着いても、自分から離れることはできません。この世界で、自分になれるのは自分だけだからです。

過去にも未来にも二人と存在しない自分を生きる。それこそが、私たちができる最大の社会貢献といえるでしょう。それは、わがままや自分勝手な生き方を意味しているのではありません。ありのままの自分を受け入れ、愛するということです。それができるとき、私たちは初めて人を受け入れ、愛し、自分に与えられた力を最大限発揮することができるからです。

だからこそ、自己理解は他者理解であり、日本を知ることは世界を知ることなのです。

国際日本学部が、世界中からの留学生とともに、日英両語で日本と世界について学んでいるのも、ここにあります。自己や他者、日本や世界を多角的にみることができる知性と教養こそ、これからのグローバル化社会で最も求められる力だからです。

これからの四年間で出会い、学び、体験することすべてが、自己と他者を理解し、多様性を受け入れ、世界を舞台に活躍する力になります。そして自分が自分の親友になれたとき、私たちは与えられた力や才能を最大限に発揮し、この世界をより豊かな世界にする、かけがえのない輝きとなるでしょう。

最後に、いつ人生という旅の終わりが訪れるか、誰もわかりません。私たちには皆もれなく与えられた、命の知られざる期限があるからです。昨日まで当たり前にあった大切な人の笑顔やぬくもりも、明日あるとは限りません。だから、二度と訪れることのない今という瞬間を生きることのできる奇跡に感謝して、自分に与えられた数えきれない幸運を存分に体験して下さい。

皆さんと四年間、共に学ぶことを心から楽しみにしています。

Profile

1976年、東京・御茶ノ水生まれ。
国際基督教大学大学院比較文化研究科修了、学術博士。
日本学術振興会特別研究員、国際日本文化研究センター外来研究員、ハーバード大学ライシャワー日本研究所ポストドクトラルフェロー等を経て、2015年4月より現職。
単著「「肌色」の憂鬱―近代日本の人種体験」（中公叢書、2014年）で第23回連合駸台会学術賞を受賞。
論文「水虫―近現代日本の栄光とその痕跡」園田英弘編『逆欠如からみた日本生活文化』（思文閣出版、2005年）他、時事通信社『金融財政ビジネス』にてコラム「ジャパン・コード」を連載中。
専門：近現代日本社会・文化史、比較文化論、日本の家族や、グローバル化と日本人の精神構造